

復活節第2主日・C年（6.4.3）

「あなたがたに平和」

復活のイエスとの出会い

早速、今日の福音ですが、イエスが、復活させられた週の初めの日、弟子たちのところに最初に現れた感動的な出来事を伝えております。それこそ、わたしたちも、この素晴らしい復活の恵みにどのように満たされて行くのかを、極めて具体的に教えてくれるエピソードと言えるのではないのでしょうか。

では、まず、ひそかに隠れていた弟子たちの様子を改めて確認して見ましょう。そこで、ヨハネは、その時の有様を、次のようにあからさまに報告しております。

「弟子たちは、ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。」

その時、弟子たちは、恐らく自分たちも若しかするとイエスと同じようにユダヤ社会の指導者たちから迫害されるのではないかと警戒し、なんと全員が一緒に隠れたいたというのであります。ですから、すべての戸に鍵をしっかりとかけていたのであります。そのときの弟子たちの心境は、ユダヤ人に対する警戒心と恐れだけでなく、また、お互い同士に対しても心の扉を固く閉ざしているような不信感もあったのではないのでしょうか。

ところが、そのように緊張していた弟子たちの真ん中に、イエスは、鍵のかかった戸を通り抜け、いきなり現れたのであります。

ということは、色々な心配事で心の扉を固く閉ざしているわたしたちの真ん中にも、復活のイエスは突然来てくださるということではないのでしょうか。

あるいは、わたしたちが試練の最中で心が穏やかでないときにこそ、復活の主が訪れ励まして下さるのではないのでしょうか。

平和をくださる

とにかく、そこでイエスは、愛を込めて「あなたがたに平和があるように」と、二回も繰り返して、早速、弟子たちに平和をくださったのであります。

テロ攻撃や、地域紛争などで、今、世界の至るところで、平和が脅かされている今日、^{こんにち}

復活のイエスは、^{まこと}真の平和を携えて必ず来てくださいます。ですから、わたしたちも平和実現のために祈るだけでなく、具体的な行動に移ることが出来るのではないのでしょうか。

実は、イエスは、すでに弟子たちには、平和について、次のような約束をなさっておられます。

「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。」(ヨハネ 14.27)

それこそ、この地上で戦争を終わらせるために、世界の指導者たちが和平交渉で締結する条約などで実現するような平和ではありません。

復活のイエスが、もたらす平和こそ、まさに神が実現する真の平和であり、すべてが満たされるといふ恵みの溢れにほかなりません。

それは、「わたしたちの平和であるキリスト」によってはじめて実現する真の平和であります。実は、パウロはその手紙の中で、そのことを極めて簡潔に次のように書いております。

「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、ご自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、・・・こうして、キリストは、双方をご自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。」(エフェソ 2.14-17)

かつて、韓国の教会を訪問したとき、地元の信者さんたちと祈りの分かち合いができました。そのときです、日本が36年以上も韓国を植民地として虐げて来た歴史を生き抜かれた年配のご婦人が、ご自分の体験を語ってくれました。

「わたしは、今日まで日本は近くて遠い国で、心の中には厚い壁がありました。けれども、今日、こうして日本人の神父さんと一緒に祈ることができたので、その壁は崩れてしまいました。」

パウロは、「キリストは、双方をご自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、」と強調していますが、それこそ死からのちへと過越された復活のイエスは、まさにわたしたちも古い自分に死んで新しいのちへと過越すること、つまり根本的に変えてくださるのではないのでしょうか。つまり、復活の恵みの日々の体験は、この過越の体験にほかなりません。すなわち復活のイエスは、わたしたちを、毎日、過去を忘れ、新に前進できるように変えてくださるのであります。

わたしもあなたがたを遣わす

さらに、復活のイエスは、その晩、弟子たちを早速、派遣なされたのであります。

「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」

ちなみに、例えばマルコは、この弟子たちの派遣を福音書の最後で次のように伝えております。

「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」(マルコ 16. 15b)

教会は、本来的に派遣された宣教共同体であります。つまり、派遣された地域の人々に、福音を告げ知らせる使命があるのであります。ですから、復活のイエスに出会う前の弟子たちのように、教会は戸を閉ざした閉鎖集団に成ってはならないのであります。特に仙台教区は、この度の大震災と原発事故によって地域に出かけて行く教会に変えられたのではないのでしょうか。

とにかく、ミサの度ごとに、わたしたちは地域に、各家庭に、各職場に福音を分かち合うために派遣されて行くのであります。

そこでイエスは、弟子たちの派遣を宣言してすぐに、なんと聖霊を注がれたのであります。「彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦され、だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。』」

わたしたちは、聖霊による罪の赦しという福音を、告げ知らせるために派遣されるのです。ですから、ルカはイエスの復活後、弟子たちの使命を次のように確認しております。

「そして、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、言われた。『つぎのように書いてある。＜メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる＞と、エルサレムから初めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。・・・』」(ルカ 24. 45-48)

今週もまた、それぞれ派遣される家庭や地域で、復活のイエスを告げ知らせることができるよう祈りましょう。